

エンカウンター（ENCOUNTER）

第 98 号

平成 22 年 6 月 20 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

相沢良一

「黒潮の神学」(黒潮社)より(1)

相沢良一(1917-2009)

1917 年静岡県伊東市に生まれる。1939 年日本神学校在学中陸軍に召集され、中支において兵役に従事した。その兵役の体験はその後の人生を決定づけた。

帰還後復学、昭和 20 年 9 月日本基督教神学専門学校(現東京神学大学)を卒業、翌月大島元村教会に赴任。牧会に専念しながら、日曜日以外の日には、元村以外の地区に徒歩により開拓伝道を行った。

昭和 26 年 6 月から島の先輩牧師白川藤太郎牧師によってはじめられた月刊伝道誌「黒潮」の発行を引き継がれ、40 年間休むことなく、平成 14(2002)年 3 月、432 号をもって終了するまで発行した。島内の家庭には、徒歩で配って歩いた時期もある。全国の教会で「黒潮」を受け取られたところが多いと思われるが、それによって相沢良一先生は全国の信者に知られた。「黒潮」は、最も多いときには、毎月 4 万部の発行部数があったが、発送は悦子夫人との共同作業であった。

平成 8 年、元村教会牧師を退任後は、全国の教会から招かれ巡回伝道にあたった。それは日本のパウロのようであった。相沢先生の教区は、日本全国であったといえる。

昭和 24 年ごろから企画された元村教会の特別伝道集会などに招かれた講師陣には、賀川豊彦、藤林益三、矢内原忠雄、南原繁、市川房江、田川水泡、日野原重明、大山泰治、三浦綾子などがいた。南原繁は、昭和 35 年に大島を訪れ、元村教会と波浮教会で、講演した。相沢先生は、その思い出を、「回想の南原繁」に「矢内原忠雄と南原繁」という題で書かれている。その回想記がご縁で、山口は、相沢先生と文通を始め、平成 19 年と 20 年、大島野地のご自宅を訪ね、歓談したことがある。

平成 21 年 9 月 23 日主に召された。91 歳 10 カ月のご生涯であった。相沢先生の活動は、元村教会の牧会と「黒潮」による文書伝道が中心であったが、それ以外にも豊富な地域社会活動を行った。

昭和 25 年には、大島元村保育園を開設、その後元村第二、野増、北の山、岡田、泉津、間伏と各地区の保育園開設に尽力した。

また元町小学校 P T A 会長や大島町 P T A 連合会長、保護司としても活躍した。さらに、昭和 39 年東海汽船争議の際は、東海汽船乗務員側のアドバイザーとして、争議を解決に導いた。昭和 40 年の元町大火の際は、復興に尽力し、土地区画整理審議会の会長を務めた。昭和 6 1 年大島噴火の際は、島民と共に東京に脱出、銀座教文館の一室で、元町教会の牧会をたもった。

相沢良一先生は、日本神学校で村田四郎先生に学んで以来、村田四郎先生を終生尊敬した。村田四郎先生は、植村正久先生に学ばれ、日本キリスト教神学専門学校校長退任後、明治学院院長、その後横浜指路教会の牧師になられた。

相沢良一先生の著書は多数あるが、主著は「黒潮」であり、黒潮の文章の中から、編集された「黒潮の神学」上下 2 巻がある。(黒潮社発行、2001 年)。これから、数カ月「黒潮の神学」の中から、抜粋して、ご紹介する。(「黒潮」の本文は、数ページにわたっているものが多いので、エンカウンター 1 ページに収まるように短くして掲載させていただきます。)

序文（抄）

村田（四郎）先生のお名前を知ったのは、先生の「パウロ思想概説」を読んだからであった。ところが中学校卒業の資格がなかったので、当時の「専門学校入学者検定試験」を取りつつ、2年間、淀橋の聖書学校で学んだ後、やっと憧れの日本神学校に入れていただいた。この当時、村田先生の講義が聞けるというだけで、胸がワクワクしていた。しかし、それも長くは続かず、中国で4年の戦場生活を送り、帰還、復学した時は、日本神学校は日本東部神学校と改名され、学徒勤労働員で、満足な勉強も出来なかった。...

大島に赴任した翌年、伊東の教会で結婚式をあげた。司式は松本廣先生、式辞の説教が村田四郎先生、祝辞は桑田秀延先生と松田政一先生であった。この際、村田先生は「近く僕の「パウロ神学の根本問題」が出版されるので、出たらお祝いに、君にあげよう」とおっしゃったので、楽しみにしていたが、先生はすっかりお忘れになってしまった。その後、「パウロ神学の根本問題」を求めて何回か読んだが、やはり、若い日に読んだ「パウロ思想概説」の方が感銘深かった。先生の「ロマ書・現代新約聖書注解全集 6巻」にも、ずいぶんお世話になった。

先生は、われわれが卒業する前年、当時の日本基督教神学専門学校の校長を辞任された。その後、明治学院院長になられた先生を所用で大学にお訪ねしたことがあった。...明治学院を復興された先生は、再び、横浜指路教会の牧師として講壇に立たれた。...日本神学校に入学を志していたある日の事であった。当時、日本神学校に在学していた先輩の向山自助氏に案内され、校長室に通された。初めて村田先生にお目にかかった筆者の気持ちは、まさに、「先生にものはいひえず」であった。先生は温顔に溢れ、早くこの学校に来るようにと筆者を励まして下さった。先生が御国に移されて、すでに30年が経過したが、筆者は今もなお先生に対して、三尺下がって師の影を踏まずの思いである。

第1講 日本伝道論 序論(1)

われわれが、いわゆる伝道を論じ、伝道を語るさい、何よりの手引きともなり、指針ともなるのは、使徒パウロの次の言葉ではないだろうか。何となれば、使徒パウロこそ伝道者であったからである。

「...わたしは、すべての人に対して自由であるが、できるだけ多くの人を得るために、自ら進んですべての人の奴隷になった。ユダヤ人にはユダヤ人のようになった。ユダヤ人を得るためである。律法のない人には 私は神の律法の外にあるのではなく、キリストの律法の中にあるのだが 律法のない人のようになった。律法のない人を得るためである。すべてのひとに対しては、すべての人のようになった。何とかして幾人かを救うためである。... あなたがたは知らないのか。競技場で走るものは、みな走りはするが、賞を得るものはひとりだけである。あなたがたも、賞を得るように走りなさい。しかし、すべて競技をする者は、何ごとにも節制をする。彼らは朽ちる冠を得るためにそうするが、わたしたちは朽ちない冠を得るためにそうするのである。そこで、わたしは目標のはっきりしないような走り方をせず、空を打つような走り方をせず、空を打つような拳闘はしない。すなわち、自分のからだを打ちたたいて服従させるのである。そうしないと、ほかの人に述べ伝えておきながら、自分は失格者になるかもしれない。(コリント人への手紙9の16-27)

このようにして、使徒パウロにとって、福音を宣べ伝えるというのは、そうせずにはおれないだけのことであったのである。戦時中のわれわれは「止むに止まれぬ大和魂」を叩き込まれた。福音を述べ伝えるということは、この意味に於いて「止むに止まれぬキリスト者魂」と言うべきであったのである。さらに使徒パウロにとって福音を宣べ伝えるというのは、他者と共に、福音にあずかることを意味したのである。この他者こそ、筆者にとっては、大島の人々であったのである。

序論（２）

今なお忘れがたい講演がある。それは戦後４年してわが大島元村教会を会場として開催された「伊豆聖会」の復活であった。…講師は信濃町教会牧師山谷省吾先生であった。先生の講演題は「初代キリスト教会は、いかにして古代 로마 帝国に勝利を得たか」であった。また駆け出しの伝道者であった筆者を鼓舞して余りがあった。

「伝道は初めから福音の生命であった。キリスト教の最大特徴は伝道宗教たる所にある。「あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し、あなたがたに命じておいたいっさいのことを守るように教えよ。見よ、わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいるのである。」（マタイ 28・19-20）復活の主の厳粛な伝道命令により、教会は福音の宣伝を第一の仕事として励んだ。ことにパウロは異邦人の最大の伝道者であって昂然たる意気に燃え、すべてを捧げて伝道し、エルサレムからイルリコの地方まで、さらに進んで首都ローマまで、あまねく福音の光を輝かせた。しかしパウロのみではなく、ペテロもヨハネもバルナバもピリポも、さらにまたテモテ、シラス、ヨハネ・マルコ、アポロ、プリスキラ、アクラなども同様に、身命を賭しすべてを投げ出して福音に奉仕した伝道者であった。」

アドルフ・フォン・ハルナックの傑作「初代 3 世紀におけるキリスト教の宣教と拡大」によると、キリスト教が人を引きつける力の秘密とその成功の要因は一つの点と多くの点にあった。すなわちその原理は一方極めて単純であって、短い二三の語をもって表出することができる。イエス・キリストがわれらの救い主、その十字架と復活によってわれらの罪が赦され永遠の生命が与えられる。ゆえに正しく歩み、再び罪を犯してはならない、という簡単な言葉で要約することができる。

そしてこの簡単な説教はあらゆる人間の生活面に訴え得た。…

教会の歩み 勤の昇天

ほむべきかな、私達の主イエス・キリストの父なる神、あわれみふかき父、慰めに満ちたる神。神は、いかなる患難の中にいる時でも私達を慰めて下さり、また、わたしたち自身も、神に慰めて頂くその慰めをもって、あらゆる患難の中にある人々をなぐめる事が出来るようにして下さるのである。(コリント後書 1・3-4)

(昭和 24 年) 2 月 26 日午後 9 時半、次男勤永眠。コリント後書第 1 章 3 節以下の聖言によって非常なる慰めを受く、感謝なり。28 日午後 2 時、白川牧師によって告別式行なわる。

私は新年早々に臥床、1 月中は身体の具合がはっきりせず、伝道も勉学も思うようにできませんでした。家内も産後の経過が思わしくなく、10 日余り岡田病院に入院。汪先生のお世話になっておりましたが、退院後数日にして次男勤が 60 日目に天に召されました。家内は悲しみやその前後の疲労が重なり、容態がまた悪化いたし、看護のため私も幾晩か徹夜をいたしましたので、この処私自身も心身ともに疲れ果てた感じです。しかしながら、父なる神の慰めを豊かに与えられ、新しく立ち上るべく祈っております。

勤を天に送った事により、何かしら天国が身近に感ぜられたような気がいたしております。神より与えられたる慰めをもってもろもろの患難におる者を、少しなりとも慰むる事の出来る者とせられたことを思いまして、感謝でいっぱいであります。

勤はロマ書 12 章 11 節より命名した子でした。私自身これからも「勤めて怠らず、心も熱くして主に仕うる」者とせられるならば、この子は天にあってさぞ喜んでくれる事でありましょう。勤が生まれましたときは、諸兄弟よりたくさんのお祝いを頂きました。今度はまた随分お世話になりました。主に在って心より感謝いたしております。(昭和 24・3)

イースター

もしキリストが甦（よみが）えり給はざりしならば、我らの宣教も空しく、汝らの宣教も空しからん（コリント前書 15 の 14）

キリスト教信仰は実に主イエス・キリストの復活の事実を立てるものである。キリストの復活の出来事がなければ、歴史におけるキリスト教の成立を説明する事は出来なくなる。「キリスト聖書に依じて我らの罪のために死に、また葬られたり」だけに尽きるならば「我々の宣教も我々の信仰も空しい」のである。されど感謝すべきかな。キリスト、「我らの義とせられるため」に、「聖書に依じて 3 日目に甦り」たもうたのである。この復活の出来事よりして、キリストの教会が誕生し、新約聖書が生まれたのである。かくて、この日が主日として、旧約の安息日にとって代わったのである。...

吾等は愛する者との死別を悲しまない。亦己自身の死をすら恐れない、キリスト甦りたもうたことにより、我らもまたこのキリストの甦りにあずかる期待と希望とに生かされておるが故である。まことに「我は復活なり、生命なり、我を信ずる者は死ぬとも生きん」（ヨハネ伝 11 の 25）である。讃めまつれ、復活の主を、栄光の主を。

家内のことで諸兄姉にずいぶんご心配をおかけしましたが、ようやく小康を得るようになりました。...けさ岡田に参り、朝日を浴びつつバスを待つ間に、聖書を開いて教えられ、励まされた個所はコリント前書 10 章 13 節でありました。「汝らが逢いし試練は人の常ならぬはなし、神は真実なれば、汝らを耐え忍ぶこと能わぬ程の試練に遭わせ給わず、汝らが試練を耐え忍ぶことを得んために、これと共に遁るべき道を備え給わん」。まことに家内にとりまして、めぐみの時、信仰の鍛錬の時でもありました。必要なものも次々に与えられ満たされ、あのザレパテの寡婦の油壺の如くでありました。神の恵みと諸兄姉の温かいお心尽くし心より感謝いたしております。

...

この町には多くのわが民あり

(1)「黒潮」の発行

わが大島伝道について語るさい、特筆大書さるべきはなんと言っても、「黒潮」の存在である。2001（平成13）年3月現在、「黒潮」は429号、1回の発行部数は4万部に達した。次の一文は1993年（平成5）年3月1日。第375号第1面「福音は黒潮に乗りて」である。「さる2月15日付の「中外日報」の「寺報にこもる布教への熱意」という「社説」の要点を転載させていただく。

「大阪近郊の法華宗系A寺院では、月刊でA5判52ページの寺報を出している。...この寺報は今年で20年目を迎えた。なぜ寺報にそれほどの精力を注ぐのか。住職はいう。

「人にはさまざまな人格があって、恒星のように自ら輝いている人もあれば、惑星のようにそのまわりを回って光を反射している人など、さまざまです。私などは、さらにその惑星のおともをする衛星のような微々たる存在ですから、...せっせと寺報を作って文書伝道につとめているわけです。」...

「話はわかるが、東京都伊豆大島の日本基督教団大島元村教会にAという牧師がいる。この牧師は長年にわたって「黒潮」というB5判4ページの小さな月刊機関誌を発行し続けている。自分の体験を率直に綴っただけの、一見薄っぺらな機関紙が全国のキリスト教徒の注目を集め、いまでは発行部数も数万を数えるようになった。キリスト教会では、1000部売れたらベスト・セラーという言葉もあるほどだが、離島の小さな教会から発信される情報が、東京や大阪の出版物に負けない影響力を持つに至ったのも、A牧師の宣教にかける熱意がこもっているからではないか。」...

「黒潮」第1信が産声を挙げたのは1951（昭和26）年6月16日であった。今と同じサイズで謄写印刷であった。当時波浮教会におられた白川藤太郎先生が「伊豆の島だより」と題して第1面を執筆された。

黒潮の発行（２）

「黒潮」は、当初は、日本基督教団東京教区第 10 分区の機関誌として発行されたもので、伊豆諸島の諸教会は、東京教区第 10 分区に所属、白川先生が分区長をされていた。

昭和 26 年 12 月 23 日発行の「黒潮」第 3 信に掲載された大石繁治先生の「伊豆七島応援記」は、日本伝道論の記念碑として称しても余りがある 1 文であったのである。（この後、大石繁治先生の「新島の巻」、
「式根島の巻」、
「大島の巻」の紹介がある。）...

このようにして「黒潮」は、謄写印刷で第 6 信（昭和 28 年 6 月 1 日）まで発行。第 7 号より伊東の大洋印刷所に依頼。活版印刷にした。それ迄数十部ほどの部数であったのが一挙に千部になった。出来上がって大島に送られた時には、白川先生も筆者もわが子誕生の思いであった。中野同盟教会の松田政一先生より「君たちは良いことをしたね」との言葉は忘れられない。

引き続き第 8 号が出来た段階で、早くも第 3 種郵便物認可が与えられ、我が元町の下原印刷所、後の大島新報社でも印刷ができるようになり、第 11 号より大島新報社に依頼、1968（昭和 43）年 2 月、141 号まで継続した。

ところが大島新報社も人出不足におちいり、ついに止むなく同年 4 月 1 日、141 号より本所緑星教会の篤信なる森鋼太郎氏の経営される印刷所「栄光」に依頼、今日に至った次第である。この時「黒潮」は 7500 部に達していた。

注 本所緑星教会は、小西芳之助先生が、最初伝道師として、務められた教会でした。

されど元町は燃えず

1965（昭和40）年1月11日の深夜から翌朝にかけて、わが住む元町は大火のため、一夜にして廃墟に帰した。…さいわいにもというべきか、我が教会の付近は焼失を免れることができた。やがて都市計画法に伴う区画整理法が適用された。筆者はその区画整理審議会の会長として不眠不休の活動をつづけた。…教会が焼けなかったから感謝である、と…みなそのように言われた。大火直後、わたし自身は焼けた方が良かったと思った。同じ苦しみを共に味わった方が気が楽になる。しかし、この2ヶ月余りの救援活動を反省し、教会堂が焼失を免れたことによって、これだけの奉仕活動ができたのだと思うと、教会が無事だったことはやはり感謝であった。（区画整理の対象になったのは、焼失地帯の1.5倍で5万坪。減歩清算は1割8分5厘。）

今晚は区画整理審議会会長としての肩書の報告でしたが、やはり牧師ですから、最後に聖書を引用させて頂きたいと思います。

詩篇126編に「主がシオンの繁栄を回復された時、我らは夢見る者のようであった。その時我らの口は笑いで満たされ、我らの舌は喜びの声で満たされた。その時、「主は彼らのために大いなる事をなされた」と言った者が、もろもろの国民の中にあつた。主はわれらのために大いなる事をなされたので、われらは喜んだ。主よ、どうか、我らの繁栄を、ネゲブの川のように回復して下さい。涙をもって種まく者は、喜びの声をもって刈り取る。種を携え、涙を流して出て行く者は、束を携え、喜びの声をあげて帰ってくるであろう」という言葉で結ばれております。「涙をもって種まく者は、喜びの声をもって刈り取る」とは、なんと慰めに満ちた励ましではないでしょうか。わたしは福江市の復興状況をこの目でたしかめて、大きな希望を与られました。わが元町も必ず復興する。いや、復興するのではなく、復興させるのだ。このような決意があつて、はじめて区画整理の大事業は成り、元町の繁栄は回復されることを信じてやみません。（65.10.1）

魂の区画整理

預言者イザヤは、今を去る二千数百年の昔に「荒野に主の道を備え、さばくに、われわれの神のために、大路をまっすぐにせよ。もろもろの谷は高くせられ、もろもろの山と丘とは低くせられ、高低のある地は平らになり、険しい所は平地となる。こうして主の栄光があらわれ、人は皆ともにこれを見る。これは主の口が語られたのである。」(イザヤ書 40 の 3-9) と叫んだ。

町の復興は、単に 16 メーター道路が 5 本完成し、軒並みが整然としたことで尽きるのではなく、これをとおして、我々は「神の栄光を見なければならぬ」のである。このためには、「われわれの神のために、大路をまっすぐにせよ」とある通り、神に至る大路をつけないければならぬ。このことはすなわち、われわれの精神生活が充実しなければならぬ、ということである。

神に至る大路をつけるために、わが教会はこの町に建てられているのである。教会とは「荒野に呼ばわる者の声」である。神より「呼ばわれ」とのみ声を聞いているものである。預言者イザヤは「なんと呼ばわりしましょうか」と問うた時に、「人はみな草だ。その麗しさは、すべて野の花のようだ。主の息がその上に吹けば、草は枯れ、花はしぼむ。しかし、神の言葉は、とこしえに変わることはない」(イザヤ書 40 の 6-8) という預言の言葉を与えられたのである。...

神のことは、とこしえに変わることはないのである。神の真理は永遠不滅である。精神生活の充実とは、この神の真理の上に立てられた生活の確かさを意味する。...

このような精神が町全体を覆う日の来ることを信じ、教会は「よきおとずれをシオンに伝えるものよ、高い山にのぼれ、よきおとずれをエルサレムに伝える者よ、強く声をあげよ、声をあげて恐れるな。ユダのもろもろの町に言え「あなたがたの神を見よ」と」(イザヤ書 40・9) の叫びを挙げ続けているのである。

(67・3・1)